

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第670号 平成26年1月10日

ハンナ・アーレント

ハンナ・アーレントは、ドイツ系ユダヤ人女性の名であり、また、現在劇場公開されている映画の題名でもあります。

ハンナ・アーレントは、第2次世界大戦が始まると、ナチス政権による迫害から逃れる為にアメリカに亡命し、バークレー大学やシカゴ大学等で教鞭を取る等、哲学者として活躍しました。彼女には、「全体主義の起源（1951年）」、「人間の条件（1958年）」等数々の著作がありますが、中でも、全体主義について分析した「全体主義の起原」によって、彼女は一躍論壇の花形となりました。

ハンナ・アーレントは、「アイヒマン裁判」の傍聴記録（イェルサレムのアイヒマン）を雑誌「ザ・ニュー Yorker」に発表しますが、その内容が余りにも衝撃的であった為にユダヤ人等から激しい批判を受け、孤立してしまいます。映画は、この顛末を描いたものです。

私は、ハンナ・アーレントの哲学者としての業績について語れる程のものは何も持ち合わせておりませんが、私が彼女に興味を引かれるのは、彼女が誹謗中傷等如何なる攻撃にも屈する事無く自説を守り通した、その信念と意思は何処から来ているのだろう、という事でした。

アドルフ・アイヒマンは、逃亡先のアルゼンチンでイスラエルの秘密警察に拉致され、イスラエル法廷で裁かれる事になります。これを知ったハンナ・アーレントは、自ら希望し「ザ・ニュー Yorker」の特派員としてその裁判を傍聴します。



ハンナ・アーレントは、被告席で尋問に答えるアイヒマンをつぶさに観察しながら、極悪非道の犯罪者と思っていたアイヒマンが、実は、ナチス権力機構の一駒に過ぎず、上官の命令、更には法律をただ黙々と遂行するだけの平々凡々で陳腐な人間であった事に衝撃を受けます。彼女は、アイヒマンのそうした姿を見て「悪の凡庸さ」と表現しました。

「完全な無思想性—これは愚かさとは決して同じではない—、それが彼があの時

代の最大の犯罪者の一人になる素因だったのだ。(中略) 現実離反と無思想性は、人間のうちに恐らくは潜んでいる悪の本能のすべてを挙げてかかったよりも猛威を逞しくすることがあるということ—これが事実イェルサレムにおいて学び得た教訓であった。」とハンナ・アーレントは「イェルサレムのアイヒマン」の中で述べています。しかも彼女は、当時のユダヤ人指導者達がアイヒマンとの間で「数十万の人々がそこからアウシュヴィッツへ送り出されている収容所のなかで〈平静と秩序〉が保たれるならば、その代償として数千人のユダヤ人のパレスティナへの〈非合法〉の出国を許す」という協定を結んだ事等を引き合いに、結果として、ユダヤ人指導者の中にナチスに迎合し、協力した者の存在を明らかにしたのです(「イェルサレムのアイヒマン」から)。

ハンナ・アーレントの傍聴記録が雑誌に掲載されるや、先程述べた様に、彼女はユダヤ人等から猛烈に攻撃される事になります。その理由は、極悪非道の犯罪者というべきアイヒマンに対して、「悪の陳腐さ」と表現した事でアイヒマンを弁護している様に誤解された事、そして、ユダヤ人指導者達の行動について触れてはならない禁忌に触れたからではないかと思えます。

組織の忠実な僕として、上司の命令に唯々諾々と従い、自らは事の善悪を考える事もしない、その様な人を我々はしばしば目にします。その人は、組織の中では優等生かも知れませんが、しかし、社会に対してはとんでもない害悪を垂れ流している可能性があります。

アイヒマンは、悪質さにおいて極めて特異に見えますが、「悪の陳腐さ」という目で見れば、誰でもアイヒマンになり得る、あるいはなっている可能性があるのです。いい換えれば、「悪の陳腐さ」がもたらす犯罪の構図は決して過去のものではなく、現代に繋がる問題だといえるでしょう。

映画終盤、大学の講堂でハンナ・アーレントが講義するシーンは圧巻でした。彼女は学生に対して最後に力強くこう語りかけます。

「人間である事を拒否したアイヒマンは、人間の大切な質を放棄しました。それは思考する能力です。その結果、モラルまで判断不能となりました。思考ができなくなると、平凡な人間が虐殺行為に走るのです。思考の嵐がもたらすのは、知識ではありません。善悪を区別する能力であり、美醜を見分ける力です。私が望むのは、考える事で人間が強くなる事です。危機的状況にあっても、考え抜く事で破滅に至らぬよう。」

「ハンナ・アーレント」は、自身の発言によって友人を失い、激しいバッシングを受けますが、思考の努力を放棄しなかったが故に最後まで戦い抜く事が出来たのだと、私は思っています。(塾頭：吉田 洋一)